

人間として「同じ」ことと、「違う」こと。

新しい「令和」の時代に込める思いに、安倍首相は、

SMAPの「世界に一つだけの花」を引用し、

「次の時代を担う若者たちが、明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる。そのような、若者たちにとって希望に満ち溢れた日本を国民の皆様とともに作り上げていきたい。」と語りました。

この言葉を聞いて、養老孟司さんが「遺言」という本の中で、

この「世界に一つだけの花」にふれていたことを思い出しました。

「ヒト社会は、かならずしもボス支配にならない。しかもいずれ民主主義に行きつくはずなのである。なぜなら人間は平等だからである。平等とは、たがいに『同じ』人間じゃないかということであり、たがいに交換可能だということである。だからこそ、逆に SMAP は『世界に一つだけの花』と歌った。ヒトを感覚で捉えたら、平等どころの騒ぎではない。みんなそれぞれ違うに決まっている。その当然をわざわざ歌い、それがヒットするのは、当然が当然ではない社会だからである。つまり違いを主張する感覚所与が排除されている社会だからである。(中略) ヒトの意識は『同じ』という機能を持ち、それによって動物とは異なるヒト社会を創り出した。それが、言葉、お金、民主主義などを生み出したのである。」

平成時代を振り返る特集で、

人生相談に「突然キレてしまう」など、内面に不安を抱える相談が相次いだ。

と振り返る記事もあった。

ヒトは「同じ」を意識しながら社会を作ってきたが、

当たり前のように一人ずつ「違う」ことに悩んできた時代であったのかもしれない。

これからの「令和」の時代に、

ヒトは、さらにコンピューターと「同じ」レベルで競争していくのでしょうか？

それとも、それぞれの「違い」の花が咲き誇る時代になるのでしょうか？

(M.Y)